

2023年4月27日

2022年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 (○) ・個人研究 ()	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部 専任講師 杉本 晃子	
研究課題名	小児看護学実習におけるルーブリック評価表の妥当性の検討	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
西田 志穂 西村 実希子 湯浅 且敏 山本 有	看護学部・教授 看護学部・助教 全学教育推進センター・准教授 看護学部・助手	研究計画・データ収集・分析 研究計画・データ収集・分析 研究計画・データ分析 データ収集・分析
研究期間	2022年4月1日 ～ 2023年3月31日	

研究実績の概要 (1)

背景

大学教育において、学修効果の可視化および成績評価の標準化を図ることを目的としたルーブリックの導入が進められている。小児看護学実習では、以前からパフォーマンスの程度を4段階で評価する評価表を使用していた。この評価表は、評価項目の抽象度の一貫性と、4段階の設定の明瞭さに課題を含んでいた。このことが、いくつかの項目において、学生の自己評価と教員評価の間にずれを生じる要因の一つとなっていた。そこで、GPAに沿った5段階で評価するチェックスタイルの新たなルーブリック評価表に改正した。今回、新たなルーブリック評価表の妥当性を検討することを目的として研究を行った。

I. ルーブリック評価表の妥当性の検討

1. 目的

新たなルーブリック評価表の導入後の成果として、ルーブリック評価票における学生の自己評価と教員の評価の一致度を検証し、妥当性を考察する。

2. 方法

1) 研究デザイン

本研究は、学生の学習の質の維持向上を目指して授業改善を目的に行う教育実践研究である。

2) 対象

2019年度後期および2020年度前期に小児看護学実習を履修した学生のうち、研究協力の同意を得られた41名(19後期26名;63.4%/20前期15名;36.6%)。実習期は異なるが同一学年である。

研究実績の概要（2）

3) 評価表

学生は、実習が終了した時点で記録物とともに提出する。これは、チェックスタイルのルーブリックであり、各セクションにはレベル別の到達目標が記載されている。学生は、自身が達成できたと思う到達目標にチェックを入れて提出する。その後、同じ評価表に、教員の評価を重ねて記載する。評価項目は8項目（Ⅰ～Ⅷ）から構成されており、レベルは5段階でLetter Grade（%）では、S（90-100）、A（80-89）、B（70-79）、C（60-69）、D（0-59）のように示す。

4) データ収集

対象学生が提出したルーブリック評価表を匿名化した後、デジタル化して一覧を作成しデータとした。対象者41人分のルーブリック評価表8項目、計328項目を分析対象とした。

5) データ分析

学生の自己評価と教員評価について、両者の項目ごとの評価を比較し、評価の一致度について記述統計を行った。（データを評価区分（S～C評価）ごとの特徴、評価区分間の違いを見出した。）実習形態の違いをふまえて比較分析し、その特徴を見出した。分析は、小児看護学が専門の4名と教育工学が専門の1名、計5名で行った。

6) 倫理的配慮

共立女子大学の倫理審査の承認を受けた後に実施した（#KWU-IRBA # 20021）

学生には、成績評価が確定した後に研究参加の募集を行い、自由意志による参加を呼びかけた。

3. 結果

1) 各評価項目における学生-教員間の評価のギャップ数

両者の間にギャップのあった項目は両学期合計328のうち、あわせて170項目（51.8%）であった。ギャップのあった項目のうち、学生評価よりも教員評価の方が高かった項目は44項目（13.4%）であった（表1）。

表1 各評価項目における学生-教員間の評価ギャップ数

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	合計
2019年度後期	15	14	11	15	15	14	18	12	114
2020年度前期	6	4	9	7	10	7	8	5	56
合計	21	18	20	22	25	21	26	17	170

ギャップのあった項目のうち2段階以上ギャップのあったものは31項目（9.5%）であった（表2）。

表2 各評価項目における学生-教員間の2段階以上のギャップ数

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	合計
2019年度後期	1	3	1	2	3	2	6	5	23
2020年度前期	1	0	2	1	0	0	3	1	8
合計	2	3	3	3	3	2	9	6	31

2) 学生ごとの分析

学生と教員の評価が一致していたものは2.4%（41名中1名）のみであった。ギャップ数が4つ・6つの学生が一番多く22.0%（41名中9名）、次いで2つの学生が17.1%（41名中7名）であった。

3) 開講期による比較

2019年度後期はCOVID-19による感染蔓延以前であり、通常の実習を行った。学生-教員間でギャップがあったのは、2019年度後期と2020年度前期をあわせたデータ全体のうち34.5%（328項目中114）であるが、2019年度後期データでみると54.8%（208項目中114）であった。2020年度前期は、COVID-19影響下にあり、全ての日程でオンライン実習を行った。学生-教員間でギャップがあったのは、2019年度後期と2020年度前期をあわせたデータ全体のうち17.1%（328項目中56）、2020前期データでみると46.7%（120項目中56）であった。

4) 項目間の比較

ギャップの出現頻度が高い順に次の通りであった。最大頻度の項目（Ⅶ：多職種連携における小児看護の役割の理解）で26（63.4%）、次いで、項目Ⅴ：子どもと家族に対する看護を実践する力が25（61.0%）、項目Ⅳ：子どもと家族の発達、生活、健康上の課題を見出す、アセスメント・計画立案する力が22（53.7%）であった。ギャップが最小の項目（Ⅷ：実習態度）でも17（41.5%）の出現頻度であった。

5) 教員の評価よりも学生の評価が高かった評価項目とギャップの出現頻度

次の項目は、ギャップのあったもののうち、そのほとんどが、教員評価よりも学生評価の方が高かった。項目Ⅳ：（子どもと家族の発達、生活、健康上の課題を見いだす、アセスメント・計画立案する力）では95.5%（22項目中21）であった。項目Ⅵ：（外来看護の特徴の理解）では95.2%（21項目中20）であった。

6) 学生の評価よりも教員の評価の方が高かった評価項目とギャップの出現頻度

次の項目は、ギャップのあったもののうち、4割以上が学生評価よりも教員評価の方が高かった。項目Ⅴ：（子どもと家族に対する看護を実践する力）では44.0%（25項目中11）、項目Ⅲ：子どもと家族について発達、生活、健康の三側面から情報収集する力では、40.0%（20項目中8）であった（表3）。

表3 各評価項目における学生評価よりも教員評価のほうが高かったギャップ数

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	合計
2019年度後期	3	3	5	1	7	1	3	2	25
2020年度前期	3	2	3	0	4	0	3	4	19
合計	6	5	8	1	11	1	6	6	44

4. 考察

2019年度後期と2020年度前期では、実習の形態が異なっていた。両者を比較すると、COVID-19影響下にあった2020年度前期では、学生-教員間のギャップの出現頻度は低かった。オンラインによる制御された設定での実習となった。これにより、目標の到達が病院での実習に比べて比較的学習しやすかったことが推察された。また、評価項目によって学生と教員間のギャップの出現頻度が異なっていた。特にギャップの出現頻度が高かった評価項目については、到達目標の適切性を査定する必要性が示唆された。具体的には、到達目標の設定レベルや、学生が理解しやすい目標の表現かどうかなど、ギャップが生じる要因について検証する必要性が示唆された。また、教員の評価が学生の評価よりも高かった学生がいた。これは、学生自身のパフォーマンスに対する自己評価が低いことを示唆している。そのため、このような学生については、自己効力感を高める働きかけが必要な場合もある。学生の特性や取り組みの傾向を吟味し、対応について検討する必要があると考えられた。

Ⅱ. 小児看護学実習における実習目標を意識した学びの評価

1. 目的

評価表の妥当性の検討の一環として、学生が実習目標をどのように意識して実習し、言語化しているのか、実習の最終レポートの記述から明らかにする。

2. 方法

1) 研究デザイン

本研究は、学生の学習の質の維持向上を目指し、授業改善を目的に行う教育実践研究である。

2) 対象

2019年度後期および2020年度前期に小児看護学実習を履修した学生のうち、研究協力の同意を得られた18名。

3) データ収集

対象が提出した実習の最終レポートを分析対象とし、個人情報等を削除した本文を電子化してデータとした。

4) データ分析

評価表の大項目をもとに、対象理解、看護実践、小児看護の役割の3つの視点で質的に分析した。1データを研究者2名でレビュー、次に全データを研究者全員で協議し、分析の妥当性を維持した。

5) 倫理的配慮

共立女子大学の倫理審査の承認を受けた後に実施した（#KWU-IRBA # 20021）。

学生には、成績評価が確定した後に研究参加の募集を行い、自由意志による参加を呼びかけた。

3. 結果

1) 関わりを通して対象を理解し、看護実践につなげるプロセスを体現する

子どもと過ごし、関心を向けて観察することで、子どもが何に興味を持ち、どのように表現しているのかに気付けるようになり、その結果、良い実践ができた実感していた。

2) 子どもの経時的な変化や患者間の違いをとらえることで子どもの特徴を明確にする

異なる時点の情報を関連付けて統合し、子どもを多角的にとらえていた。また、患児間の違いを認識することで、発達段階や健康状態がより明確になったことを表現していた。

3) 自身の実践が、子どもの最善の利益を守る態度としてふさわしいかを自問しながらかわる

子どもは話さなくても「沈黙の叫び」があるとして観察力を発揮し、子どもの権利が守られていない場面に疑問を持ち、子どもが理解できるようにかわる必要性を見出して実践につなげていた。それが子どもの「小さな成功体験」となるとも認識していた。

4) 成人看護との違いや、座学の学習との違いを認識し、小児看護の特徴を理解していく

対象理解が進み、子どもに適したケアができるようになることで、実践の細かさや工夫の必要性を実感していた。そして、自身の理解のプロセスを含めて、小児看護が楽しいと思えるようになっていた。

4. 考察

ルーブリック評価表では、具体的な行動目標を提示しており、学生はレポート内でそれらの表現を使用して、できるようになった経緯の具体は説明するものの、どのようにしてできるようになったのか、自身を振り返った内容の記述は少なかった。このことから、学生は、評価表を実習の到達目

標をとらえるために活用しているが、十分に省察的な思考を深めることができていなかったことが考えられた。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

・ Nishida, S., Sugimoto, A., Nishimura, M. Yamamoto, Y. & Yuasa, K. (2022). Validation of a Rubric Evaluation Form for the Child Health Nursing Practicum. 25 th East Asian Forum of Nursing Scholars.

・ 西田志穂, 西村実希子, 杉本晃子, 山本有 : 小児看護学実習における実習目標を意識した学びの評価 学生のレポート分析から. 第 42 回日本看護科学学会学術集会講演集, P2-119, 2022.